

研究ノート

ブルーノ・タウトの『アルプス建築』とそのユートピア

赤 木 良 子

要約

ドイツの建築家ブルーノ・タウト (Bruno Taut: 1880-1938) は、20 世紀の初めにユートピア的建築スケッチを多数残している。それらは一見、非現実的な夢物語として見ることもできるが、近代建築史上、見過ごせない作品群の一つである。本稿では、それらのスケッチのうち『アルプス建築』を中心としてその紹介と、筆者がこれまでに行ってきたスケッチの形態分析を通して、タウトのユートピアにおけるデザイン手法について概観し、今後の研究の展望について考える。

1. ユートピアとは

1-1. はじまりのユートピア

“ユートピア”という語は、もともと 1516 年に出版された、イギリスの人文主義者であるトマス・モア (Thomas More: 1478-1535) によって書かれた著作名であると共に、作中に登場する架空の国家 (図 1) の名前である。その後、実現しないものや理想的な社会を指す言葉として使われてきた。しかしモアがこの言葉を使うよりはるかに古くから人間は、この現実世界とは対立する理想の世界について度々描いてきた。空想の中に描いた世界はもはや現代の我々には確認することはできないが、古く記録されたものの一つとしてよく知られるのは、ヒッポダモスのミレトス都市計画 (図 2) であろう。このあまりにも有名な幾何学的都市計画は、のちのユートピアにも影響を与えたことが一般的に知られている。

しかしここに登場する碁盤の目の直交線はもっと古くから地球上にあった。オリエント文明、アッティカ、そしてピラミッドもその例に漏れな

い。では何がこのような幾何学的都市をユートピアの原初として位置付けさせるのであろうか。『ユートピアと文明』を著したフランスの作家ジル・ラプージュ (Gilles Lapouge: 1923-2020) の指摘¹によれば、“彼 (ヒッポダモス) が幾何学的法則に従わせるのはもはや寺院とか記念碑ではなく、都市の形態そのもの”であり、“直線や直角は、宗教的象徴に使われるのではなく、反対の使命を課せられる。すなわち合理的秩序を人間の住居に課するという使命を。人間の住居を、土地の制約からも神々の戒律からも解放するのだ。ヒッポダモスと共に直交線の役割が変わる。それは俗化して、都市のシステムを構成する。それは人間の住居を新しい大地の上に、すなわち数学のそれの上に築く。” (引用文中のカッコは筆者による。)

このミレトス以降、西洋の進出とともに幾何学的な都市が数多く出現することとなる。そしてこの“意思を持った都市²”，すなわち人間が人間のために都市を計画するというプランは後のユートピストの原初となったというわけである。

¹ ジル・ラプージュ著、中村弓子、長谷泰、巖谷國士訳、『ユートピアと文明 輝く都市・虚無の都市』、紀伊国屋書店、1988 年、15 頁。

² 前掲書、17 頁。



図1 初版の『ユートピア』の挿絵（1516年）

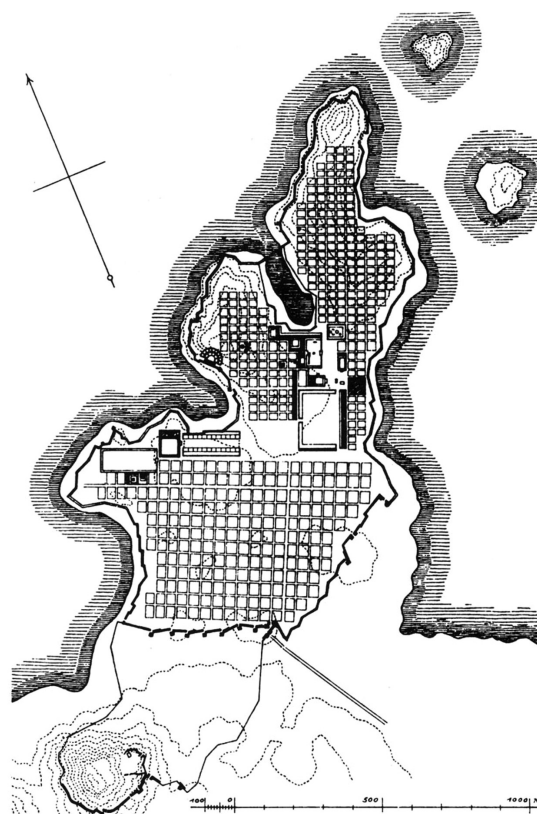


図2 ヒッポダモスのミレトス都市計画図

1-2. 「再建のユートピア」としての理想国家

アメリカの建築評論家、歴史家であるルイス・マンフォード（Lewis Mumford: 1895-1990）は『ユートピアの系譜』の中で、“ユートピアとはそれ自体でひとつの世界を構成し、それぞれの理想国家に分割され、勇敢にも、良き人生を目指す誇りに充ちた都市へと結合した共同体を言うのである。”と述べている³。マンフォードは、このユートピア、つまり理想国家は、それが描かれた時代の“形式と色彩”を反映するとし、プラトンの『国家』では、ペロポネソス戦争（The Peloponnesian War, 431-404 BC. スパルタ・アテネ間）が引き起こした社会の絶望的状況という背景を指摘している。トマス・モアの生きた時代もまた、15世紀の終わりから16世紀にかけてイングランドとフランス間に起こった百年戦争、薔薇戦争が続いていた頃であった。この期間にはペストの流行や農奴の反乱と封建制の崩壊への流れもあり、社会は混

乱を極めていた。つまり、このような混乱と不安が渦巻く社会的背景において、ユートピアという理想国家は常に描かれてきたとマンフォードは指摘する。

ここでマンフォードは、ユートピアを二つに分けて論じた。ひとつ目は、“逃避のユートピア”であり、他方は、“再建のユートピア”である。“逃避のユートピア”は、厳しい現実から逃避する偶像の世界を呼ぶ。この世界は欲求不満や艱難辛苦を解放する場であって個人的な小さなユートピアである。例えばそれは殺伐とした工場の事務所に貼られる美しい映画女優のポスターのようなものであり、あるいはなんでもできる魔法の物語であり、清々しく敵を倒すヒーローの映画である。このような逃避のユートピアは今なお、日常的に存在しているが、留まることの危険な世界でもあるとする。一方、“再建のユートピア”は、例えそれが幼稚な欲望や願望に発するものであれ、実現す

³ ルイス・マンフォード著、関裕三郎訳、『ユートピアの系譜』、新泉社、1971年、6頁。



写真1 ブルーノ・タウト

る世界を前提としており，“物理的な世界と観念の再建”を目指すものだとする。この定義に沿うならば，ユートピアを描いた者の多くが建築家であることも頷ける。そして，この“再建のユートピア”こそが，マンフォードの論じるユートピア：理想都市の対象であった。

本稿で紹介する，ブルーノ・タウトのスケッチ群は，第一次世界大戦中という社会混乱を背景に描かれた。それらは“再建のユートピア”に属するものとも言える。そして，近代建築史上においては，1910～30年代に始まり徐々に形を表し普及した，いわゆる「モダニズム建築」の始まりの過程における重要な動向の一つとして位置付けることができる⁴。

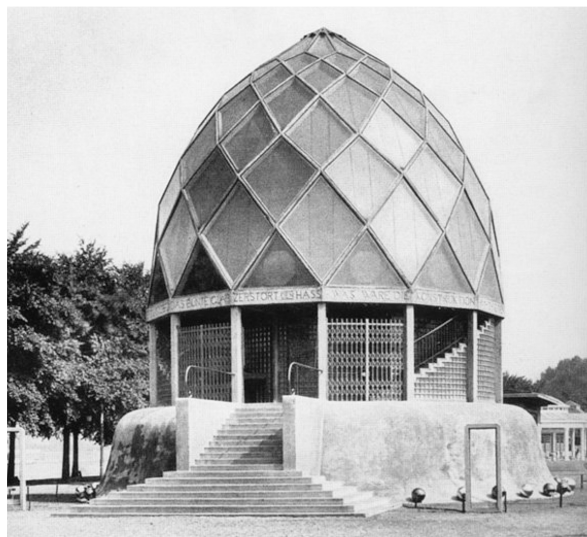


図3 「グラスハウス」

2. ブルーノ・タウトと既往研究

ブルーノ・タウト（写真1）は，当時のプロイセン，ケーニヒスベルクに生まれた。実作としては1914年のドイツ工作連盟展における「グラスハウス」（図3）や，2008年に世界遺産に指定された，ベルリンのモダニズム集合住宅群のうち四つのジードリンクなどが特によく知られる。この後者の作品等ではモダニズムの建築家として知られる一方で，表現主義の建築家としても位置付けられてきた。タウトは，若き日からコンペで数々の成果をあげ，自身の建築事務所を開いてからは主にベルリンを拠点として活躍した。晩年には日本に3年ほど滞在し，伊勢神宮や桂離宮を絶賛したことでも記憶されている。日本を去ったのちはトルコのイスタンブール芸術アカデミーの教授として招聘されるも，わずか2年で客死する。

タウトと表現主義に関する既往評価については，これまで時系列に大きく三つの時期に整理してきた。まず，近代建築史の初期においてはほぼ言及されることがなかった時期，次に60年代における表現主義リヴァイヴァルによる資料の発掘

⁴ タウトのユートピア構想がモダニズム建築形成過程で果たした役割については以下の論文を参照されたい。研究代表者 杉本俊多，『ベルリン・モダニズム建築形成過程の再定義』平成25年度～平成27年度 科学研究費補助金（基礎研究C）研究成果報告書（研究課題番号25420670），平成28年3月。

と公開の時期、そして70年代以降の表現主義の再評価と研究の時期である。70年代以降にはタウトに関して優れた示唆に富む研究書もいくつか出版された。例えばクルト・ユンクハンスによる初めての総合的なタウトのモノグラフである『ブルーノ・タウト 1880-1938⁵⁾』（初版1971年）や、ヴォルフガング・ペーントの『表現主義の建築（上・下）⁶⁾』（1973年）などが挙げられる。また、1976年から78年にかけてベルリン工科大学にて行われたユリウス・ポゼナーによる講義録『近代建築への招待⁷⁾』においては、表現主義についてより深く内的な眼差しが向けられた⁸⁾。

その後も継続的に本国ドイツにおいてタウト再評価が進んでおり、ユートピア期についてもある程度研究がなされてきている⁹⁾。日本においては、タウトの日本滞在時に多くの著作が遺されており、それらは早くから邦訳が出版されてきた。その中で日本の伝統建築について理論的に評価したものなどはよく知られていたものの、ユートピア期についてはなお、スケッチの紹介¹⁰⁾や描かれる背景にとどまり、スケッチ自体の踏み込んだ言及はあまりなされていない。近年の注目すべき動向としては、タウトの日本での著作が、タウト研究者であるマンフレッド・シュパイデル（Manfred Speidel: 1938-）により、ドイツ語版で続けて出版されていることである。特に本稿で触れる『都市の解体』については、ようやく近年（2020年）にドイツ語完全復刻版¹¹⁾が刊行されたばかりである。

3. ユートピア的建築スケッチが描かれた背景

タウトがユートピア的な建築スケッチを数多く描いたのは、第一次世界大戦中の混乱した時代の、多くの建築家がその実質的な仕事を失っていた時期であった。当時タウトは表現主義の建築家や芸術家と共に、芸術・社会改革運動を積極的に展開していた。そして、これらのスケッチと構想を、終戦後に立て続けに四冊にして出版した：『都市の冠（Die Stadkrone）』（1919年）（図4）、『アルプス建築』（1919年）（図5）、『宇宙建築師』（1920年）（図6）、『都市の解体』（1920年）（図7）である。本研究では、この時期をタウトのユートピア期とし、特に後半の3作品をユートピア三部作としている。

これらのスケッチはのびやかなフリーハンドで描かれた多色刷りとなっており、そこには自然や宇宙を舞台として浮かぶガラス建築、幾何学的なオブジェや、時には惑星自体が建築の星として描かれるなど、一見突飛とも思える想像豊かな発想で描かれたユートピア的世界が展開されている。『宇宙建築師』のみはモノトーンで印刷され、紙芝居あるいは劇場を想定したようなシーン展開によって、ゴシック大聖堂が崩壊し、新しい建築があたかも生物のように大地から生えてくる物語仕立てとなっている。終戦直後の物資の乏しい時期にあって、タウト自身による豪華な装丁のこれらの出版は話題となった。

タウトの社会的活動の基盤は、「芸術労働評議

⁵⁾ Kurt Junghanns, "Bruno Taut 1880-1938", 2.Aufl., 1983, Berlin(W).

⁶⁾ ヴォルフガング・ペーント著、長谷川章訳、『表現主義の建築（上・下）』、SD選書205、鹿島出版会、1988年。タウトに関しては上巻Ⅱ 発展2節で論じられている。

⁷⁾ J. ポゼナー著、田村都志夫訳、多木浩二監修、『近代建築への招待』、青土社、1992年。本書は、ポゼナーによる講義をまとめた『講義録・新しい建築の歴史（Vorlesungen zur Geschichte der neuen Architektur）』からの抄訳である。

⁸⁾ 2012年までの既往研究のより具体的な経緯については拙著を参照されたい：赤木良子 広島大学博士学位論文『ブルーノ・タウトのユートピア的建築スケッチのデザイン方法に関する研究』2012年。

⁹⁾ 近年のタウト研究動向については、北村昌史著、『ブルーノ・タウトに関する研究の動向』史学研究会（京都大学大学院文学研究科内）、2017年5月31日 に一通りまとめられている。本稿では参考にしつつ、さらに後に出版された情報なども考慮した。

¹⁰⁾ 2012年までに書籍等で紹介されたスケッチの時期と図版番号の詳細は、注釈8における拙著論文の序章において表にした。参考とされたい。

¹¹⁾ Bruno Taut, "Die Auflösung Der Städte", Gebr.Mann Verlag, Berlin, 2020.

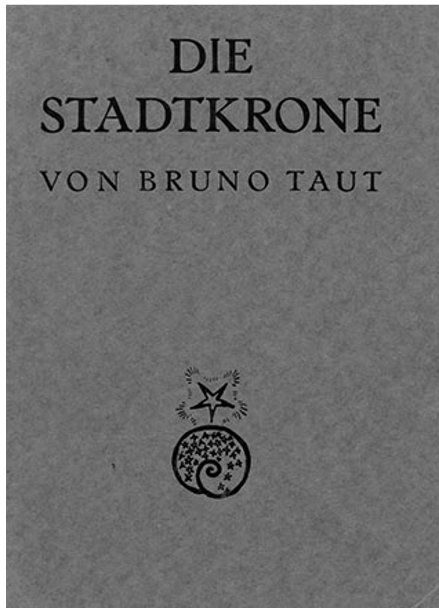


図4 『都市の冠』“Die Stadtkrone”表紙

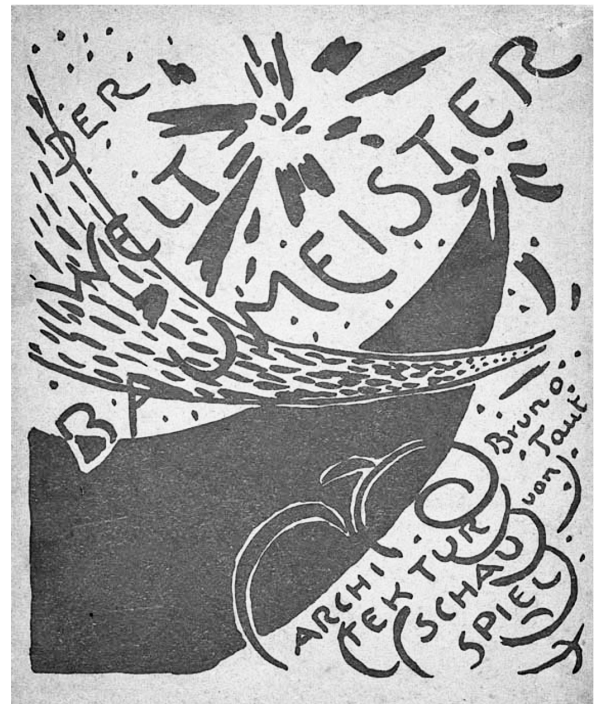


図6 『宇宙建築師』“Der WeltBaumeister”表紙

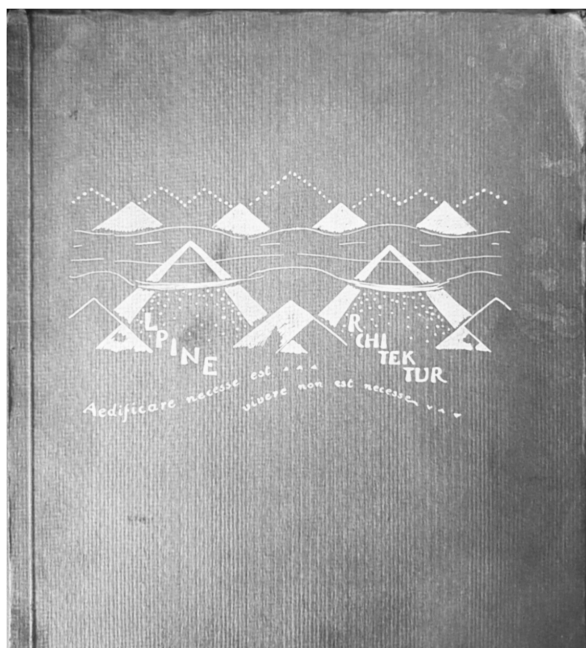


図5 『アルプス建築』“Alpine Architektur”表紙

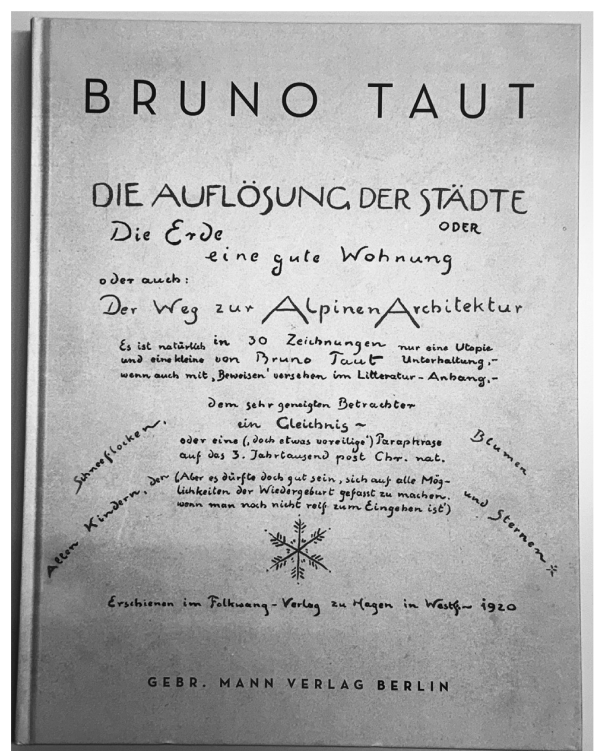


図7 『都市の解体』“Die Auflösung Der Städte”表紙（復刻版）

会」,「11月グループ」,「ガラスの鎖」などの組織を立ち上げたことにあった。芸術労働評議会では初期の議長を務め、ユートピア的な要素が色濃くあった。「ガラスの鎖」のメンバーは1919年4月に行われた「無名建築家展」のメンバーからタウト自身が12名を選出し、結成された。そこではペンネームで呼ばれる各メンバーによる自由な発想で描かれたスケッチや文章などのアイデアが廻文により共有され、精神的な改革がタウトにより

呼び掛けられた(図8)。タウトのペンネームはガラスを意味する“Glas”であった。なお、メンバーにはのちにバウハウスに関わるワルター・グロピウスも“Mass”というペンネームで含まれて

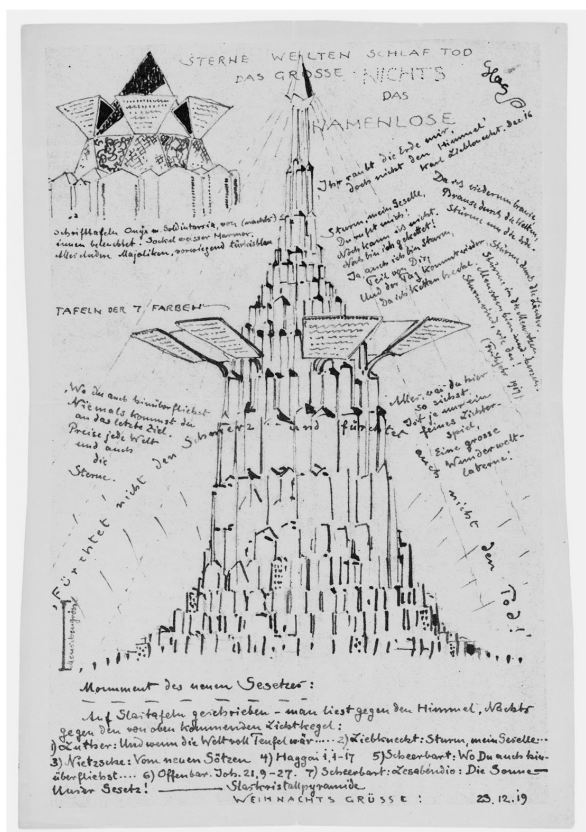


図8 ブルーノ・タウト「ガラスの鎖」1919年12月19日付書簡

いたが、結局“Mass”による書簡が送られることは無かった。タウトはグロピウスに関して、1919年12月19日付の書簡で、グロピウスが懸念を持ちつつ意欲は表明したと記している¹²。

タウトは時代の変革期を強く意識し、ユートピア的なアイデアやグループによる社会的な活動等によって、建築芸術の名の下に、あらゆる概念や基本原理を見直し、精神的な改革を起こそうとしていた。これを背景とし、タウトのユートピア三部作は描かれ、出版された。

4. タウトとパウル・シェーアバルト

“我が友の遺稿に対するささやかな責任を果たすべく編集したこの作品は、1917年に構想され、1918年に描かれたものである。成立の背景は創



写真2 パウル・シェーアバルト

作者の心の中にあった。世界中のありとあらゆる戦禍の痛みに血を流し続けた心の中に。”

これは掲載されなかった『アルプス建築』序文の冒頭文¹³である。この、“我が友”そして“創作者”とは、パウル・シェーアバルト (Paul Karl Wilhelm Scheerbart: 1863-1915) (写真2) を指している。シェーアバルトはドイツの詩人であり作家であった。彼の小説は宇宙奇想譚、つまりはSF作品とも呼べるべきもので、1890年代から幻想的なガラス世界をさまざまに描いていた。シェーアバルトとタウトは、ちょうどタウトがケルン展の「ガラスハウス」の設計に着手していた頃に出会ったとされ、その後もガラス建築のビジョンが互いに影響しあいつつ両者の作品へと反映されていく。タウトもたびたびシェーアバルトを引用しながら、そのビジョンを深めていった。しかし、シェーアバルトは戦争中の1915年、戦争反対のハンガー・ストライキ（あらゆる栄養摂取を拒む）を断行し、この世を去った。

構想は1918年とあるが、序文によればシェー

¹² Herausgegeben von Ian Boyd Whyte und Romana Schneider “Die Briefe der Gläsernen Kette”, Ernst & Sohn, 1986, p19.

¹³ マンフレッド・シュバイデル／セゾン美術館編・著、『Bruno Taut Retrospective Nature and Fantasy ブルーノ・タウト 1880-1938』、トレヴィル、1994年、164頁。

アバルトの生前に、すでに構想があったことが伺える。それらのビジョンは“突飛な印象を抱かせるに十分なもの”としつつも、その実現性（規模、資金、労働力、犠牲、構造等）についても話し合ったようである。先に出版されていた『都市の冠』の冒頭にも、シェーアバルトによる散文「新しい生 建築の黙示録」が掲載されており、内容はすでに『アルプス建築』を予感させ想起させる幻想的なものであった。シェーアバルトの影響は、タウトのユートピア作品に色濃く反映されているのである。

5. 『アルプス建築』

5-1. 全体構成

『アルプス建築』は、そのタイトルの通り、アルプス山中を舞台として壮大なガラスを用いた建築物を配置し、湖、島、そして惑星にまで及ぶ自然をモチーフとして、宇宙スケールにまで至る幻想的なスケッチ集で、1919年の末に、ハーゲンのフォルクヴァンク社から出版された。本作は目次やタイトルなどタウト自身の手で描かれ第1章～第5章に分かれて30枚のスケッチが収められており、以下の構成となっている。

第1章 クリスタルハウス 4枚

無名の山中にあるガラスの聖堂

第2章 山岳の建築 7枚

無名の山中にある巨大建造物

第3章 アルプス建築 10枚

実際にある地名が示されたアルプス周辺の仮想構造物

第4章 地殻建築 4枚

空や宇宙から地球を見下ろすかのような視点で描かれた島、地表の造形など

第5章 星の建築 5枚

宇宙から宇宙を見る視点で描かれる惑星である。

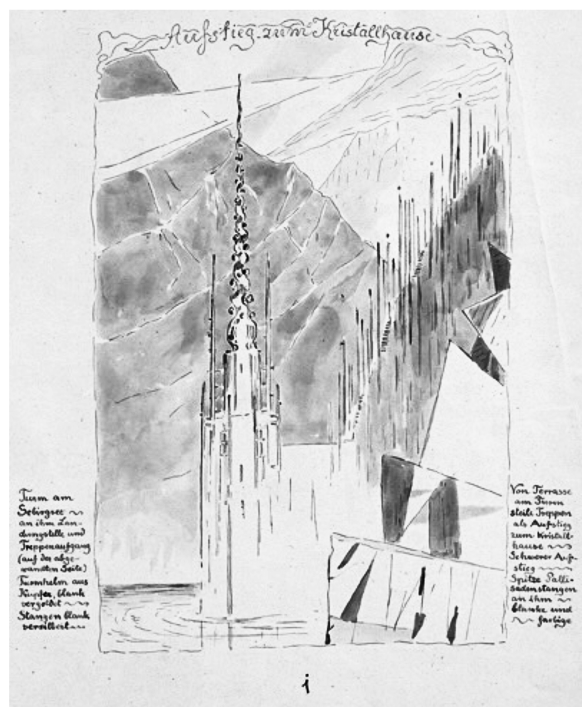


図9 第1図 クリスタル・ハウスへの登り道

5-2. 『アルプス建築』第1章 クリスタル・ハウス：その構成と形態

この節は4枚のスケッチ（図9～12）によって構成されている。他の節と違って主題となる建築物「クリスタル・ハウス」へ至る道筋を、順に並べたもので、連続展開つまりシークエンスの表現になっている。最初の入り口（図9）には山中の湖畔から聳え立つ印象的な尖塔が描かれており、ここが上陸地点である。すぐそばには鉾物のような巨大な岩、その脇には、聖堂へと続く険しい階段がある。階段の脇に無数に立つ針状の柵は多彩で輝く。次の画（図10）を見ると左下に先ほど登ってきた階段が描かれているので続きの風景であるとわかる。階段を上り切ると風景が一変する。そこには峡谷があり川が流れている。橋を渡れば左右の岩山に掛かる連続のアーチをくぐりながらさらに階段が続き、さらに上方へと誘われていく。3枚目（図11）はカラーとなっていて、「クリスタル・ハウス」が描かれる。淡い色彩の表現となっており、それまでの険しさが一転して華やかで平和な雰囲気が描かれている。ここには第1図と第2図にも登場した独特のねじれた尖塔や、針状のものが再び姿を現し、幾重にも重なるガラ

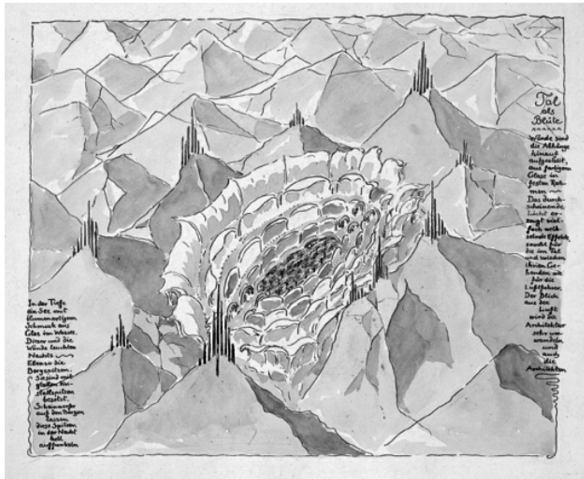


図 14 第 6 図 花冠の谷

至るが、ここが後陣に当たる部分となるであろう。形態的には、アーチ、針状の部分、ねじれた尖塔など、いくつかの独特の形態要素が直接大地の中に配置され、自然の一部が聖堂全体の一部と融合している様子が描かれている。タウトは、聖堂という一つの建築物を、直接自然の中へと溶け込ませて山全体を一つの空間として再構成するという手法をここでは展開している。

5-3. 第 2 章～ 5 章の概要

以下は主に視点変化に着目しつつ、各章の概要を述べる。

①第 2 章 「山岳の建築」

第 2 部ではそのタイトル通り、山そのものを建築とみなしたスケッチが並んでいる。(図 14～図 16) それらはヒューマンスケールを超えた巨大な構造物である。第 5 図の添え書きに「建築と住宅は分離しうるものである」とタウトは書いており、人間的視点からの超越が示唆されている。スケッチは空からの視点で描かれ、壮大な「建築」への視点変化が見られる。

②第 3 章 「アルプス建築」

本章には最も多くの 10 枚のスケッチが収録される。前章と異なり、アルプス周辺にある実際の地名によって具体的な位置が示される。第 15 図(図 17)に描かれた海の端にある巨大建造物は、無数の針状の形態と半円ドーム型の屋根によって

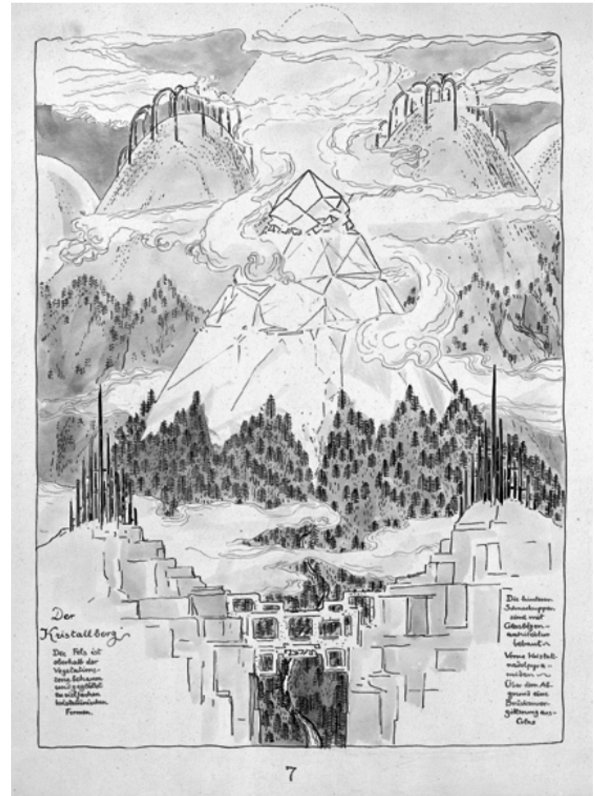


図 15 第 7 図 クリスタルの山

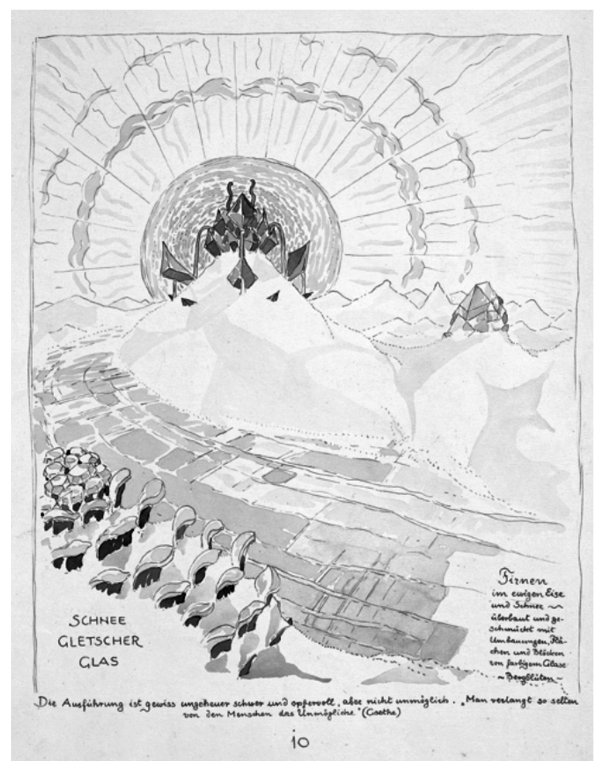


図 16 第 10 図 雪 氷河 ガラス

構成され、垂直性が強調され天を仰ぐような空間である(図 18, 19)。第 17 図(図 20)においては、

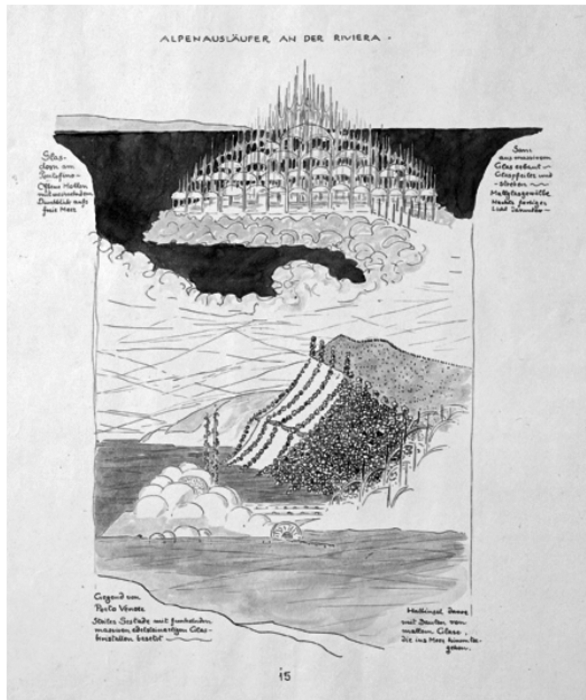


図 17 第 15 図 リヴィエラ海岸のアルプス末端部

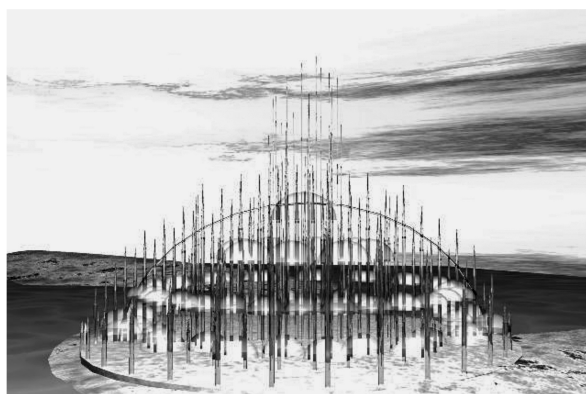


図 18 第 15 図 リヴィエラ海岸のアルプス末端部 (復元 CG)

遠くから見た建築地帯として光り輝く巨大建造物が描かれている。これは後に触れる『都市の冠』を想起するが、ここでは都市が自然に置き換わっている。第 19 図 (図 21) に描かれた鐘楼のような建築は第 21 図 (図 23) で色彩豊かに描かれ、そこでは多彩な光によって彩られており、音楽が聞こえてきそうである。これらの地点は特にアルプスの中で高い山々が選ばれており、その高い山々を遠くから俯瞰するような視点で描かれたスケッチが登場し、その視点は地図的なものへと変化している。

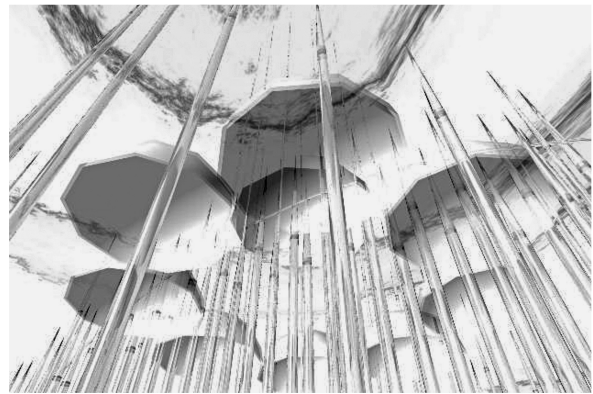


図 19 第 15 図 リヴィエラ海岸のアルプス末端部：下から見上げる (復元 CG)

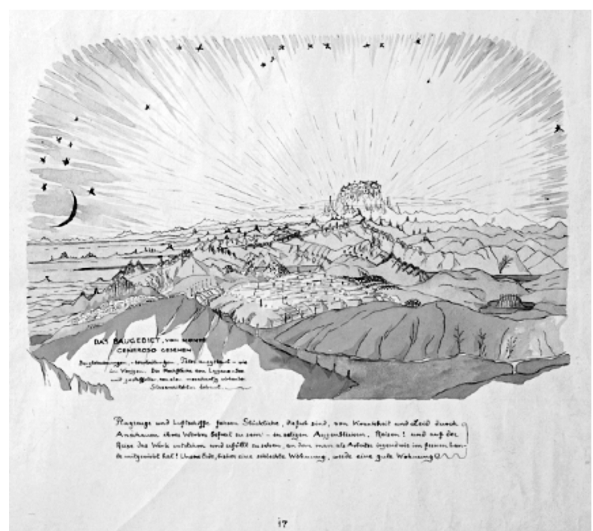


図 20 第 17 図 モンテ・ジェネローソから見た建築地帯



図 21 第 19 図 モンテ・ローザの建築

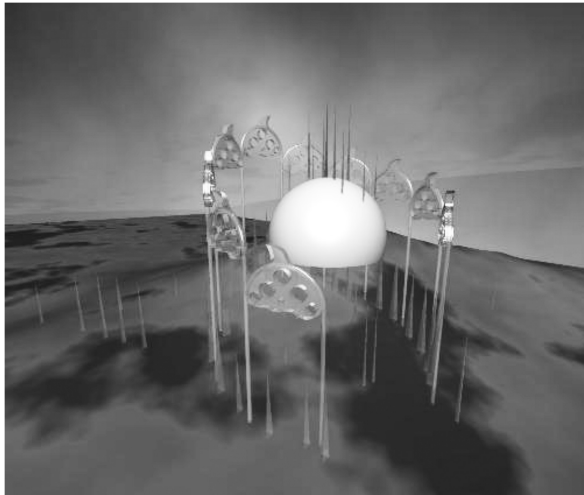


図 22 第 19 図 モンテ・ローザの建築 (CG 復元)

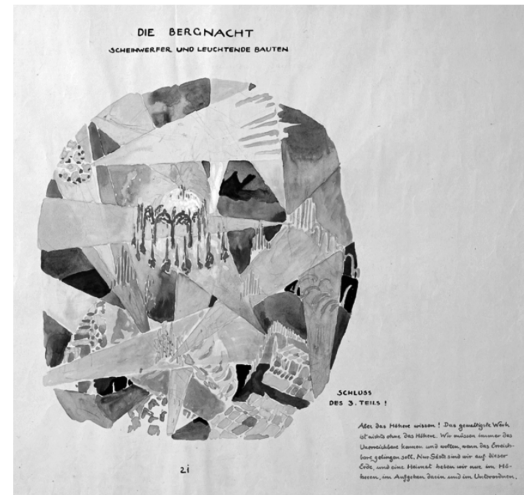


図 23 第 21 図 山の夜

③第4章 「地殻建築」

本章は、島や地球が描かれる(図 24, 25)。島は空からの視点であり、前章の地図的スケールからさらに上へと舞い上がり、宇宙的視点へと変化していく。第 25 図は深い青、黄色、グレーの中に、銀色の着色がなされており凝っている。このとりわけ美しい地球のスケッチには、「ヨーロッパには明るさがあるが、アジアには多彩な夜の暗さの中にそれ以上の明るさがある」とタウトは書いており、印刷にも銀色の彩色が施されていて、本作を代表するスケッチの一つである。

④第5章 星の建築

我々の視点は、宇宙へと誘われる。これらのスケッチは、さまざまな「星」つまり惑星(図 26, 27)がデザインされているという非常にユニークなユートピアである。例えば第 26 図(図 26)はゴシック風の大聖堂がそのまま惑星となっている。第 28 図(図 27)は「星のシステム」とあり、星の運動が表現され、普遍的な世界の形態を想起させる。そして視点は、宇宙から宇宙を見る視点へと繋がり、本書は締め括られる。



図 24 第 24 図 リューゲン島

5-4. 「視点」の変化から見る物語性

前節まで、第 1 章をやや詳細に、第 2～5 章を「視点」を中心に概観してきた。この切り口で本書を眺める時、そこには各章における明確な視点の違いが見出せた。それは、一人の人間の視点か

ら始まって、徐々にそれが遠のき、ついには宇宙的な視点へと緩やかに、自然に変化していった。それはあたかもこの画集を見ているものが、徐々に宇宙へと誘われるかのような巧みな操作である。そこには、一個の人間の意識を、徐々に広げ

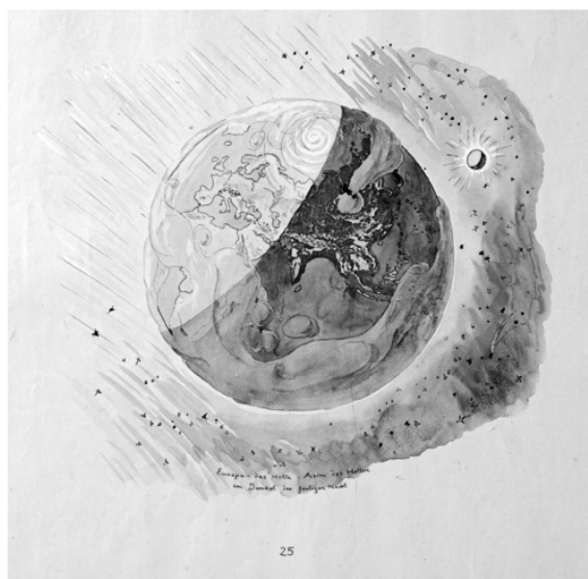


図 25 第 25 図 地球, アジア側

ていき, 自然, 島, 惑星, 宇宙へとその領域を拡大していくというビジョンが示されており, そのビジョンの中心には, 常に建築があった。ここには, 建築を中心に据えた一つの物語性が示されている。この遠のく視点位置には, まさに前節のシェーアバルトの小説, 例えば『灰色の布と 10 パーセントの白』や、『リヴァーナとカイドー』等に登場する飛行船からの視線がシークエンス的に視覚表現されており, シェーアバルトの世界観が反映されていることが見て取れる。序文にはこの作品を交響曲のような 5 部構成にしたとあり, それはまさに音楽的でさえある巧みな視覚的シークエンスの中に表現されているのではないだろうか。

5-5. 形態分析および形態的特徴

本書『アルプス建築』のスケッチに登場する多くの建築物, 構造物について, 著者はその形態的特徴を詳細に把握するために, それらを構成する要素を全て抽出し, それを「形態要素」として, まとめた¹⁴。また, 復元 CG を用いて形態や位置, スケッチにない角度等の検証も行ってきた(図 13, 18, 19, 22)。形態要素表の掲載は割愛するが, 表から, それらの傾向が三つの形態に主に分類で



図 26 第 26 図 ドーム星 (大聖堂星)

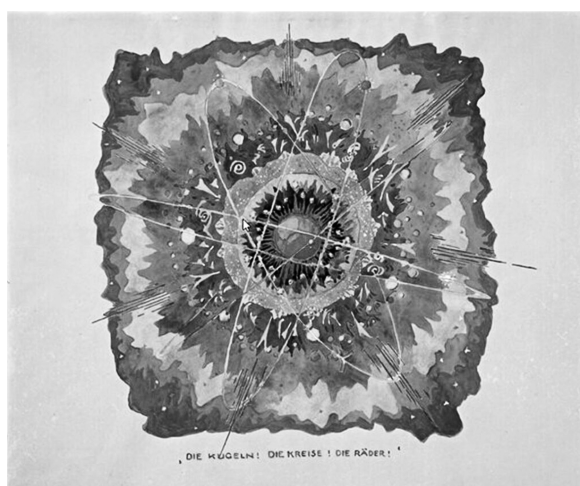


図 27 第 28 図 星のシステム 球体! 円環! 車輪!

きることが確認された。それは, 歴史的形態, 植物的形態, そして結晶形態である。歴史的形態には半円アーチや東方的なものなど, さまざまな影響が見られたものの, 最も顕著だったのはゴシック様式からの影響であった。例えば変形の一形態として第 1 図(図 9)に見られたようなねじれた尖塔なども含んでいる。植物形態には花の形をした第 6 図(図 14)「花冠の谷」に見られるガラス

¹⁴ 脚註 5 の前掲書の第 2 章に表を掲載してある。

の構造物などに顕著であった。最後の結晶形態は、至る所に見出され、タウトのユートピア的な形態を代表する形態の一つとして位置付けられると結論した。なお、この形態分析は、『宇宙建築師』についても行ない、同様の結果が得られている¹⁵。実は、結晶形態については、ペントも指摘しているように、「光り輝くクリスタル」は、タウトばかりでなく、表現主義者にとって根源的で高貴なものを表象すると理解されていた¹⁶とする。また、冒頭に引用したラプージュも水晶、ダイヤモンドのような石英が“ユートピアの物質の中で最も注目すべきもの”と指摘している¹⁷。

6. 風景の視座の獲得から分散的都市『都市の解体』へ

大戦後タウトによって最初に刊行された『都市の冠』は、ユートピア作品の先駆けとなっていて、さまざまな実際の都市の図版を参考資料として掲示しながら、一つのオリジナルな都市を提案している（図28）。ここでは都市の中心となる一つ小高い「冠」建築を中心とした都市形態が研究されており、それは集中型の都市構図であった。この構図は、『アルプス建築』においては前述したように、例えば第17図（図20）の中に同様の構図が見出せるものの、それは自然に置き換わっていた。

『宇宙建築師』では、ゴシック大聖堂が崩壊し、再生した建築像「水晶館」が描かれている。古い建築観が解体され、断片となって宇宙に散り、地上に降り注ぎ、その後大地から建築が生え出でる。この新しい「水晶館」について筆者が行った断面・立面の分析¹⁸により、天地軸に基づいた天井の宇宙と大地の自然現象をつなぐ建築像、すなわち天に表される幾何学と地に表される植物的な形態が一つの構図の中に一体化されていたことが伺え

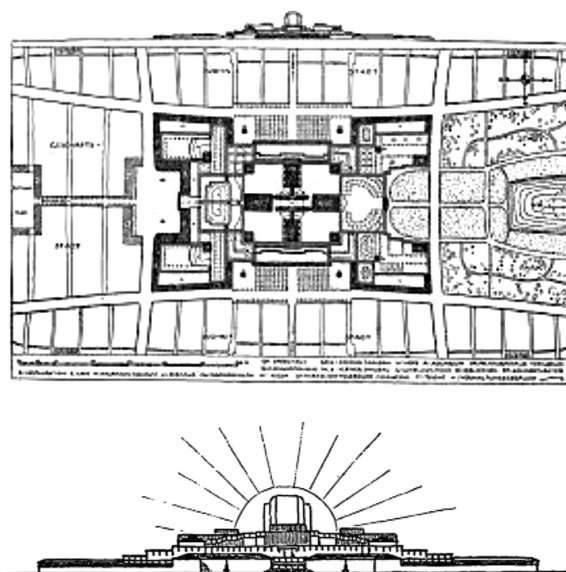


図28 『都市の冠』都市の冠、平面図（上）、西側立面図（下）

た。

このように生み出されたイメージは、『アルプス建築』においては、建築の断片、あるいは建築のディテールと呼べるものがアルプスの山々に、島に、宇宙に、再構築された。例えばそれは第1章では、大地とのより多様な融合として描かれている。また、第24図（図24）の島のスケッチでは形態要素が地形や線に沿って連続、集合、点在などのように配置され、地形そのものとなって現れていることが確認される。また、第7図（図15）における地形そのもののデフォルメなども見出される。

以上のように、地形を考慮した配置、変形、そして自然地形そのものを取り込みランドスケープに馴染ませるという手法は、タウトが風景という視座を獲得したことを示している。タウトは『アルプス建築』の中で、公にしたばかりの『都市の冠』の考え方を自ら否定するような記述を残しており、集中式の都市を否定し、地表面に分散

¹⁵ 赤木良子、杉本俊多著、「『宇宙建築師』に見るブルーノ・タウトのユートピア的建築形態の生成方法」、『日本建築学会計画系論文集』、第77巻、第677号、1779-1784頁、2012年7月。

¹⁶ 注釈6、上巻、80頁。

¹⁷ 注釈1、「水晶の輝きのうちに」、193頁。

¹⁸ 注釈9と同じ。



図 29 第 30 図 星 幾つもの宇宙世界 眠り 死 大いなる 無 無名なるもの 終わり

する集落的風景のアイデアを得るに至った。

これらの再構築された建築群には、シェーアバルトから着想を得た巨大なガラス建築と冷たく静かで浮遊した宇宙のイメージが重ね合わされる。『アルプス建築』最終図となる第 30 図（図 29 は、「星 幾つもの宇宙世界 眠り 死 大いなる 無 無名なるもの 終わり」）によって締めくくられている。これは亡き友への弔いの言葉であろう。シェーアバルトは、名もなきものを愛し、建築もその名を明かさぬべきであると説いたという。究極的には、「理念」のみが、建築において輝

くとタウトも言う¹⁹。それこそが、アドルフ・ベーネ（Adolf Behne: 1885-1948）²⁰ がタウトの作品をして、「表現主義的建築」であるといったことへと結びつく。ベーネのそれは、impressionism（印象主義的）の対極をなすものとしての expressionism（表現主義的）であり、前者は外から内へと向かうもの、後者は内から外へと向かうもの、であったが²¹、それは、まさに建築が理念そのものから生まれると言うことを言い表していた。本作品は、序文の通り、『アルプス建築』は、シェーアバルトの建築構想がスケッチに具現化されたものであったかもしれないが、タウトはそこに、独特の形の生成法を見出していたと思われる。ここで獲得したランドスケープ的な視座は、最後のユートピア作品である『都市の解体』へとタウトを誘い、死とは正反対の、生への復活が、分散的な都市像の中に具現化されている。そこには、『アルプス建築』に見られた硬直した冷たく、「死」や「永遠」を彷彿とさせる巨大なガラス建築は、いくらかその後半に見出せるものの、多くを占めているのは、柔らかな曲線に沿った小さな家々、花の形をした集落（図 30）などである。そこには明らかに「生」とあたらしい世界への希望が反映されている。

7. 自然の中にある形態の自己生成

これまで触れてきたように、タウトはまず『都市の冠』の中で既存の冠型の都市を数多く提示しつつ、冠をいただく集中型の都市像を提案した。次の『宇宙建築師』においては建築の崩壊と再生において、『アルプス建築』においては交響曲の構成を取りつつ断片が再構成する物語として、建築や都市が内なるものから外へと向かい形として具現化するプロセスを示していた。そして、『都市

¹⁹ 注釈 11, 165 頁。

²⁰ ドイツの美術史家、評論家。ベーネはタウトと関係が深く、ガラスの鎖にも声をかけている。『都市の冠』においても彼の論文「建築芸術の再生」が掲載されている。略歴については、次の書籍巻末を参照されたい。ブルーノ・タウト著、杉本俊多訳、『都市の冠』、中央公論美術出版、2011 年、171 頁。「建築芸術の再生」は 111 頁。

²¹ 前掲書、156 頁。ここには、アドルフ・ベーネが 1913 年の『パン』誌における論文中にタウトの建築について表現主義の建築という概念を使ったとされる。また、おそらくこれが表現主義という言葉が最初に使われたのではないかという指摘がある。著者はベーネの原著の論文を未確認であり、ここでは二時資料における推論であることを記しておく。

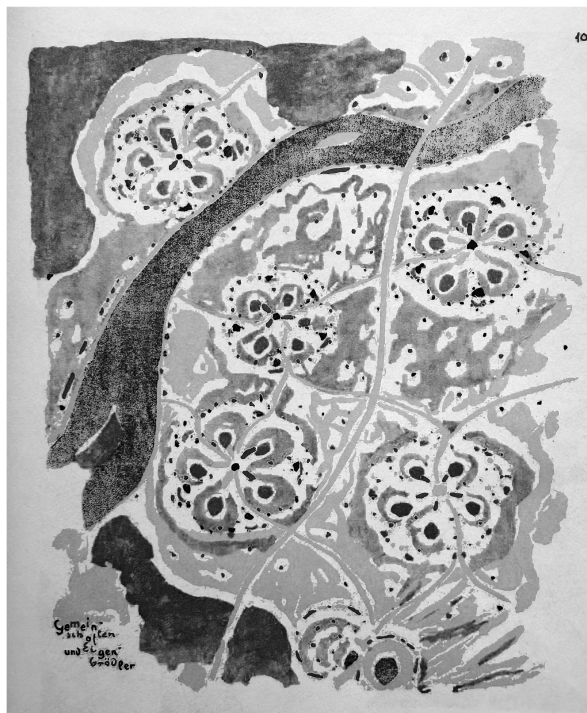


図 30 『都市の解体』第 10 図

の解体』においては、それらの集大成として新たな分散的都市や建築が提示されている。これらのスケッチについても、著者は形態的な分析を試みた²²。そこには植物的有機性を持ちつつ、幾何学形態からの形態変化などが観測され、有機的な形態モデルがいくつかの類型として見出された。このような有機的な形態モデルの中には、自然界に見られる自己創出性のシステム、自己組織化のシステムの志向さえも見出せた。これは、個々の持っている主体性が秩序によって自らの形態を多様に創出していくというものである。これはのちに生物学の分野で知られるようになる概念であり、物理学者であるイリヤ・プリゴジヌが提唱した秩序構造である散逸構造²³へと通じる。タウトはもちろんその概念について知り得なかったであろうが、ここには外形的な形態の模倣を超え、

自然界の持つ有機的なシステムを建築と都市の形態に取り入れていたことが認められる。つまり、都市を生きたものとみなし、そのモデルを自然界の自己創出的な形態に求めていたと考えられる。長らくユートピストが好んだとされる石英(水晶、ダイヤモンドなど)に想起されるイメージは、再びラプージュの言葉を借りれば、「規則的にして限りなく反復的、神秘そのものと化するほど神秘の翳りもなく、美しく鮮烈で、規矩正しく、いつどこにあっても同一で、固くて冷たく、老いと衰えを知らぬもの²⁴」と評される結晶形態であった。タウトの『都市の解体』においてその形態の源泉は、結晶形態そのものではなく、自己創出的なシステムへと変化していったことが想起されるのである。

『都市の解体』では、30 枚の図版の最後に、長々と引用文が附されている。それは田園都市思想や相互扶助論などの論文であり、思想的にもタウトのユートピア建築と都市構想の集大成であると思われる。

まとめ：今後の研究の方向性について

タウトのユートピア的建築スケッチの中には、表現主義、さらにはモダニズムを超えて、非常に先駆的な建築と都市モデルの形態創出のプロセスが見出されたと言える。4つの作品を通してそのプロセスを確認することができた。これまでユートピア作品そのものについてはあまり踏み込んだ分析はなされてこなかったが、形態分析によってその一部がある程度、明らかになったと思われる。この先駆的であり、今でも新鮮な驚きを与えてくれるタウトのユートピアのスケッチは、その時代背景が色濃く反映されており、ある種の熱に浮か

²² 形態分析は、拙著「ブルーノ・タウト著『都市の解体』に見られる分散的都市像における有機的形態モデルに関する研究」、『日本建築学会計画系論文集』、第 79 巻、第 695 号、253-259 頁、2014 年 1 月を参照されたい。また、注釈 4 の研究に内包される個別研究：辻川晃太郎、杉本俊多著、「ブルーノ・タウト著『都市の解体』における「大星殿」の形態復元に関する研究」、日本建築学会中国支部研究報告集、第 37 巻、861-864 頁、2014 年 3 月。

²³ エリッヒ・ヤンツ著、イリヤ・プリゴジヌ序文、芹沢高志、内田美恵訳、『自己組織化する宇宙』工作舎、1986 年。

²⁴ 注釈 17 に同じ。

された激動の一面もまた透けて見えた。しかし時代の熱が過ぎ去っても、『アルプス建築』については、タウト自身ものちの日記に幾度か回想しているように²⁵、生涯タウトにとって重要な作品であったようであり、単なるスケッチではないことは明らかとなっている。大戦後の1920年代にはいわゆるモダニズムとしてのちに評価されたジードリンクなど、多数の公共の仕事にタウトは没頭することになり、30年代にはロシア、そして日本を経て、トルコ時代へと移りゆく。特にロシア時代、トルコ時代などのタウトについては今後もまだ研究の余地が残されていると言える。また表現主義の建築そのものについては、タウトと同時代の他の建築家についてもまだ研究の余地が多くあり、それらを総合的に踏まえていくことが今度の課題でもあるであろう。また、エコロジーやオーガニックなどの現代建築における形態的に類似した現象と表現主義との関係性なども、今度の興味深い課題の一つとして挙げられると思われる。

図版出典および参照：

『アルプス建築』：ドイツ芸術アカデミーデジタルアーカイヴから引用：<https://digital.adk.de/>
(ただし、画像の余白を切り落とし、若干の明暗補正等を行った)

『都市の冠』：脚注20に記した書籍から引用。

『都市の解体』：脚注11に記した書籍から引用。

「ガラスの鎖」：次の二冊（ドイツ語版、英語版）を引用・参照した：Iain Boyd Whyte edited and translated, “The Crystal Chain Letters”, The MIT Press, 1985, London. Herausgegeben von Iain Boyd Whyte und Romana Schneider, “Die Briefe der Gläsernen Kette”, Ernst & Sohn, 1986, Berlin.

図13, 18, 19, 22：筆者作成。

※ 分析当時に用いた画像は、それぞれの論文の脚注を参照されたい。

²⁵ タウトがナチスから逃れてベルリンからチューリッヒに到着した際の日記（1933年3月16日）に、『アルプス建築』と『都市の解体』が改めて考慮に値すると記しているとされる。注釈13, 157頁。（原文：Bruno Taut, Tagebuch “Bis Japan” にあるとされるが、筆者は未確認）。また、日本についてからの日記にもアルプス建築について回想した箇所がある：1933年6月25日日記、篠田英雄訳、『日記—タウトの日記1933年』、岩波書店、1975年、151頁およびドイツ語版, “Bruno Taut in Japan Das Tagebuch Erster Band 1933”, Gebr.Mann Verlag, Berlin, 2013, p87.

Bruno Taut's "Alpine Architecture" and Its Utopia

AKAGI Ryoko

Abstract

German architect Bruno Taut (1880-1938) left numerous utopian architectural sketches in the early 20th century. While these might at first glance appear to be unrealistic fantasies, they constitute an indispensable collection in the study of modern architectural history. This paper focuses on introducing these sketches, especially "Alpine Architecture," and provides an overview of Taut's design methods within his utopian vision through the form analysis of the sketches conducted by the author so far. Furthermore, it considers prospects for following research.

